

しかし、上掲の発表題目のなかには、あるいは正しく伝えていないものがあるかもしれないことを恐れる。またなお Tekin の発表があり、Vienna は自分が編纂した独蒙辞典についてのべた（これについて Sinor からドイツ人が蒙古人かだれが使うための辞書か質問があった）。また Rona-Tas もアルタイ語の都市を表わす語の由来について発表した。これについて筆者もコメントして南のツングース語への借用語やアイヌ語のコタンの語のことをのべた。しかしこれらの発表の題名を筆者は残念ながら書きとめていない。また筆者は席をはずしていたときもあり、上掲の発表者名、発表題目になおもれているものがあつたり、あるいはとりやめになったものがひょっとして混入していたらおゆるしを願いたい。これらの発表論文は雑誌 Central Asiatic Journal にのることになっている。

PIAC という小会議の重要な意義は、この分野の各国の研究者が互に顔を合せ、個人的に話し合う機会となっていることにある。筆者もガバイン教授、メンゲス教授その他のかたがたに久しぶりにお会いできた。一方、同じ分野の研究者ではじめて会う人も少くなかった。ツングース語を研究する若いドイツ人にも会い、たくさん質問を受けた。また、古代ウイグル語研究の Röhrdorn 教授は、二十年まえハンブルグで一年間ガバイン教授の授業を受けたとき一緒にまだ若い

学生だったことを、Confession のときのかれの声をきいていて思い出した。

PIAC のメダルの今年度受賞者は、出席者の投票の結果、候補者の一人ソ連の N.A. Baskakov にきまつた。また PIAC のために The Uralic and Altaic Department of Indiana University, Bloomington, Indiana から PIAC Newsletter が発行されているが、D. Sinor から次号記事の原稿募集の知らせがあつた。

七月三〇日夕に、オーストリア科学アカデミーのレセプションがウィーン旧市内の同院の大広間で開かれ、参加者一同が招かれた。また三一日午後ウィーン市内のバス観光が行なわれ、夕方からはウィーン市長の招待の晩さんがドナウ公園の "Au-Restaurant" であり、翌八月一日朝朝食後解散となつた。

イセシビケリアルジャンル

オスマン帝国におけるアシレットと ユリクとの区別

永田雄三 訳

ここに訳出し紹介しようとする論文は、トルコの中東工科

大学 (Orta Doğu Teknik Üniversitesi) 助教授 イセシム
ケニールジャンル (İsenbike Arıcanlı) 氏が『第一回トルコ
社会経済史国際会議 (First International Congress on the
Social and Economic History of Turkey, 1971~1972)』と
おいて表題にみられるテーマ “Osmanlı İmparatorluğunda
Yörük ve Aşiret Ayırımı” と題してトルコ語でおこなった
口頭発表の「護雅夫氏を通じて寄せられた草稿である。筆者は
残念ながらこの会議に出席する機会をえなかったが、幸いに
してハジエテペ大学助教授 T. Baykara 氏が筆者に送って
くれた会議の「研究発表要旨」(同上会議‘ Abstracts of the
Papers, Ankara, 1977) とその後におもめられた「報告書」
(Social and Economic History of Turkey (1971~1972) :
Papers Presented to the First International Congress on
the Social and Economic History of Turkey, Ankara, 1980)
とによって会議の様子を垣間みることが出来る。それらの資
料によると、会議は一九七七年七月一日~三日にかけ
て、四つのセッション (A : 一九七一年~一九〇〇年、B :
一九〇〇年~一九〇〇年、C : 一九〇〇年~一八〇〇年、
D : 一八〇〇年~一九二〇年) に分けておこなわれた。会場
はアンカラのハジエテペ (Hacıettepe) 大学である。四つのセ
クションでの発表者は総計一二七名にのぼり、トルコのほか、
アメリカ・イギリス・フランス・オーストリア・西ドイツ・

イタリア・オランダ・エジプト・シリア・ヨルダン・イスラ
エル・ブルガリア・ルーマニア・ユーゴスラビア・ハンガリ
ー・チェコスロヴァキアの十七カ国におよんでいる。日本人
の発表者は残念ながらみられないが、トルコ史、中東史研究
で知られる著名な学者たちがほぼ顔をそろえている。

ところで、この会議はその名前こそ「トルコ社会経済史」
となっているが、うえにあげた A~D にいたるセッション分
けを見ると、そのほとんどがオスマン帝国 (一二九九~一九
二二) 時代に関するものであることがわかる。周知のごと
く、オスマン帝国はその創建後まもなくして今日のアナト
リア、バルカン、アラブ地域、北アフリカなどに領土を拡大
し、その大部分を一九世紀まで維持したのである。したがっ
てオスマン帝国の社会経済史とは、とりもなおさず、うえに
のべた諸地域の近世から近代にかけての社会経済史を意味す
る。そのかぎりでは、この会議にみられる「トルコ」という
命名は、かならずしも正鵠を射たものではない。アラブやバ
ルカン諸国からの参加者の多かったのはそのためである。だ
が、この会議のもつ意義は、それがこのように広い地域をカ
バーするというだけではなく、むしろ、もっとも注
目すべきことは一二七人の発表者が、いわゆる年代記や勅令
などの古文書を利用した従来の文献学的・歴史学的方法にと
どまらず、社会学、政治学、経済学などの方法をも駆使し

て、オスマン帝国支配下の中東やバルカン地域に対して、きわめて多様な角度からの接近を試みていることであろう。そして、そうした意欲的な発表が主として若い研究者たちによってなされているのである。それだけに、なかには実証性に乏しく、空論に終わっている発表もみられるが、こうした新しい角度からなされる努力は、これまであまり利用されなかった資料を活用し、また従来からよく知られた資料の新たな意味づけへと進む可能性を秘めているともいえよう。そうした意味で、この会議は、オスマン帝国支配下の中東およびバルカン諸地域研究の将来のあり方を示唆する、きわめて有意義なものであった。

ところで、一九八〇年に出版された「報告書」は、会議における一二七の報告のうち、わずかに三八しか含んでいない。その理由は Osman Okyar 氏の序文によれば、主として財政的なものであり、選択の基準についてはとくにのべられていない。今回訳出したアルジャンル氏の発表も「報告書」にみられないもののひとつであるが、筆者がこれを訳出したのはつぎの理由による。すなわち、アルジャンル氏の発表は、アナトリアにおける遊牧民を内陸アジアにおけるそれとの比較においてとらえようとするところにあり（ただし、内陸アジア側の事例はモンゴル族）、その視角は西アジアへ移動したトルコ族の歴史をトルコ民族史の流れの中に位置づ

ける作業につながると思われるからである。わが国におけるトルコ民族史研究は内陸アジアの、しかも主として古代の、研究に重点がおかれている。また西アジア史の側からトルコ史を扱う研究者は、これをイスラム史もしくは西アジア史の枠の中のみで扱うといった傾向がみられる。このことは、つとに指摘されてきたことである。しかし、内陸アジアと西アジアとを共に含んだ、古代から現代にいたるトルコ民族史を明らかにすることは必要なことであり、そのことはまた、西アジアや内陸アジア地域の研究にとっても意義のあることである。そうした点から、アルジャンル氏の報告は、わが国におけるトルコ民族史研究が進むべき方向のひとつを示唆する内容を含んでいると思われる。ただし、同女史はまだ若手の研究者であり、今回の報告もまだ一つの「試み」の域を出ていない。訳者自身、この報告のオスマン朝の遊牧民に関する部分には、必らずしも満足できないし、内陸アジア側に関してもいろいろと問題点があることは予測される。しかし、旧バシキール共和国の首相をつとめた、トルコ民族史研究の碩学、故ゼキ・ウェリディ・トガン (Zeki Velidi Togan) 教授を父とし、彼女自身約二年間、台湾への留学経験をもって中国語と漢文史料の取り扱いとを心得えた、トルコでは数少ない研究者の一人として、同女史があえてこのような試みをおこなったことは、わが国のトルコ民族史研究を裨益するところ

があると考えてここに訳出した次第である。

訳文において、使用された記号はつぎのとおりである。

① ——— ダッシュではさまれた部分は原著者による補足的説明である。

② 「」内は訳者が、文意を明確するために補足した説明である。

③ () は訳者が原綴を示すために挿入したものである。

④ 「」は訳者が固有名詞に付したものである。

⑤ “ ” は原著者が下線を付した部分である。

⑥ 『 』 は原著者が ≪ ≫ で示した部分である。

(一) (二) (三) 以下各章立ては訳者が適宜つけ加えたものである。なお、本文の理解を容易にするために、訳註および原註を、本文の前に付しておく。

訳註

(一) *kayim, ulus, il* はふつう部族あるいは民族と訳されるが、本訳文ではこれらの言葉については原語で示した方が以下の叙述をわかりやすくすると思われるので、カタカナ表記にとどめ、あえて翻訳しなかった。

(二) *kabile* も氏族もしくは部族などと訳されるが、原語をそのまま示しておいた。

(三) *boy* も一般に部族と訳されるトルコ語である。この語

については、本文でとくにことわる必要のないときは部族と訳し、他の語（たとえば *oymak* *oymak*）との関連で原語で示しておいた方が良いと判断された場合のみ、原語で示した。ボイリベイは族長と訳しうるが、歴史上重要な用語であり、他の用語との区別を明確にする関係上、原語のまま示した。ただし、モンゴル族に関連して使われた場合のみ部族長と訳した。

(四) *oğlak* もふつう氏族と訳しうるが、他の語（たとえば *ジェマアト*）との混乱をさけるために原語で示しておいた。同じことは *ジェマアト* についても同様である。一般にオスマン朝において、*boy, oymak, aşiret, cemaat* などの血縁的集団を示す用語は、資料のうえで使われ方がまちまちであり、そのおのおのの訳語を正確に決めることは困難である。

(五) 一般に、スルタンをはじめ、オスマン王家の一員、高官、州（*エヤレット*）や県（*サンジャク*）の軍政官たちの生計を保証する租税収入源をさす。ティマール制との関連でいえば、最上級（一〇万阿克チェ以上）の封土を指すことになる。

(六) 広義には被支配者階級、すなわち納税者一般を意味する。狭義には農民を指し、また一八世紀以後にはオスマン帝国支配下のキリスト教徒を示す侮蔑的な意味でもちいら

れた。ここでは広義の意味でもちいられている。

(七) イスラム教徒にとっての二つの聖都、メッカとメディナを指す。

(八) 歴代スルタンの母、姉妹、娘、側室たちにあたえられたハス。

(九) ムカーター (*mukâta*) とは、一般に徴税請負に出された一定量の租税を意味する。ハーネ (*hâne*) は、ふつう「戸」と訳される。ここでは、これらのユリユク集団から徴収される租税が請負に出されていることを示す。ハーネはここでは遊牧民のテントもしくは一家族を示すと思われるが、そのどちらにあたるかは決定しがたい。なお訳文で、「アンカラ・ユリユクたちのようにひとつのサンジャクに、あるいはウシヤク・ユリユクたちのようにひとつのカザー (*kaza*: 郡) に属する (??)」と訳しておいた部分は、意味が不明であるが、原文ではつぎのとおりである。

“.....Ankara Yörükleri gibi, sancağa bağlı, Uşak Yörükleri gibi kazaya bağlı mukataa haneleri olduğu gibi.....”しかし、原著者が原註(20)で示した個所によれば、アンカラ・ユリユクたちはそれ自身ひとつのカザーを形成し租税をサンジャク・ベイに納めていたとの記述がある (F. Simer, *Türk Aşiretlerine Umumi bir Bakış, İstanbul Üniversitesi İktisat Fakültesi Mecmuası*, 11, S. 517)。

これによると、アンカラ・ユリユクたちから徴収される租税は (おそらくアンカラ県の) サンジャク・ベイに割り当てられていたと思われる。しかし、ウシヤク・ユリユクたちについては原註(20)で示された文献には原文の意味を明らかにするような記述はない。

(一〇) ペルシア語で、分散しバラバラになった状態を意味する。オスマン朝で、軍事的・財政的用語として各種の意味に使われるが、ここでは税制上の用語としてもちいられている。すなわち、特定の部族集団から分離して遊牧生活をつづける小集団がそれぞれ一つの租税単位として把握された場合である。本文中にみられるように、かれらはアンカラ、キュタヒヤなど地域名や職種名でよばれた。ただし、本文ではこの言葉が、ペルシア語本来の意味で、普通の形容詞としても使われている。したがって前者の、すなわち税制上の用語としてこの言葉がもちいられた場合にのみ、これを「細分化した」と訳し、「」をつけて区別することにした。

(一一) *Avânz* オスマン朝の税制度の中の「慣習税 *Rüşm-i öfkeye*」のひとつで、最初は艦隊のためにオールを製作したり舵手をつとめるなどの労役形態をとったが、のちに金納化された恒常化した。くわしくは Ö.L. Barkan, “*Avânz*”, *İslâm Ansiklopedisi*, Cüz 11, S. 13~19. ㉔

は *EL²*, Vol. 1, pp. 760~761.

(一二) 原文では *mirî mukataat iltizamına* (国有地の徴税請負) となっているが、最後の *iltizamına* は *'mültezimine* (徴税請負人) でないと意味が通らない。

(一三) *oak* ただしこれにはいろいろな集団があり、ここではどれを示すのか不明。また原註(25)に示された文献はまだわが国に将来されていないので参照できなかったが、原文の記述からみて西アナトリア (アナドル州に含まれる) のユリック集団のうち、原文でのちにふれられるバルカンのユリックと同様一種の軍事的任務をもつオジャクとして組織された集団を指すと思われる。ただしその規模はバルカンの場合よりかはるかに小なり (Cf. I. Göken, 16. ve 17. Asır Sicillerine göre Saruhan'da Yürük ve Türkmenler, İstanbul, 1946)。

(一四) 註(一一)の述べた慣習税のうちの一。いわゆる *da' H. İnalçık, Osmanlılarda Raiyet Rütünü, Belleten, XXIII (1959), S. 575~610.*

(一五) 所有する半に對して課せられる税で、*ayrım* 頭と *çakı* フクチ *çakı* である。

(一六) これも「慣習税」に属する雑税の一種。 *Selâmiye* も *Toprak bası* も、いずれもシャリアにもカーヌーンにも認められていない税で、地方官や徴税官がこうした法

規定外の税を勝手に徴集することをビダアとして禁ずるのがスルタンの為政者としての役割の一つであった。

(一八) ルーメリヤ (もしくはバルカン) のユリック集団は本文にみられるように、二四人 (より一般的には二五人) のちに三〇人で一つのオジャクを形成し、それがさらにいくつが集まって一つの集団 (*taife*) を形作っていた。各オジャクは、そのうち五人がエシキンジとよばれて交代制で出征 (もしくは軍事的性格をもつ労役 義務を果し、残りの二〇人もしくは二五人がヤマクとよばれて、出征するエシキンジに對して現金援助 (五〇アクチエ) をおこなう。これについては T. Gökbilgin の秀れた研究がある (*Rumeli'de Yürükler, Tatarlar ve Evlâd-ı Fatihan, İstanbul, 1957*)。

原註

(1) Faruk Demirtaş (Sümer), "Osmanlı Devrinde Anadolu'da Kayılar", *Belleten*, 47 (1948), s. 575-615 (593) ve "XVI. Asırda Anadolu, Suriye ve Irak'ta Yaşayan Türk Aşirelerine Umumi Bir Bakış", *İhtisat Fakültesi Mecmuası*, 11 (1949), s. 509-522.

(2) Faruk Sümer, "Osmanlı Devrinde Anadolu'da Yaşayan Bazı Üçöklü Oğuz Boylarına Mensup Teşekkül-

- ler”, *İktisat Fakültesi Mecmuası*, 11 (1949), s. 437, 508 (505) ve “Türk Aşiretlerine Umumi Bir Bakış”, s. 511, 520.
- (3) Faruk Sümer, “Türk Aşiretlerine Umumi Bir Bakış”, s. 511, 520.
- (4) Faruk Sümer, “Türk Aşiretlerine Umumi Bir Bakış”, s. 511.
- (5) Cengiz Orhonlu, *Osmanlı İmparatorluğunda Aşiretleri İskan Teşebbüsü (1691-1696)* (İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları No. 98, 1963), s. 15.
- (6) Faruk Demirtaş (Sümer), “Osmanlı Devrinde Anadolu’da Oğuz Boyları”, *Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Mecmuası*, VII/2 (1949), s. 321-386 (340-363), “Üçüklü Oğuz Boyları”, s. 443-475.
- (7) Faruk Demirtaş (Sümer), “Bazulus Hakkında”, *Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Dergisi*, VII/1 (1949), s. 29-60 (40, 47-60).
- (8) Nejat Göğünç, XVI. Yüzyılda Mardin Sancağı (İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları No. 1458, 1969), s. 53-54.
- (9) F. Sümer, “Türk Aşiretlerine Umumi Bir Bakış”, s. 515.
- (10) F. Sümer, “Türk Aşiretlerine Umumi Bir Bakış”, s. 515 ve “Kayılar”, s. 596: Kâmil Su, *Bahkesir ve Civarında Yörük ve Türkmenler* (İstanbul, 1938), s. 28, 92-96, 52.
- (11) これらのうち、たとえば Bozuş集団が、その名を諸侯国時代の高官 Bozuş Bahadır からえていることは知られているが (F. Sümer, “Türk Aşiretlerine Umumi Bir Bakış”, s. 515), Kara Hail, Gök Musa などのジェエマトが誰と関係あるかはわからない (K. Su, *Yürükler ve Türkmenler*, s. 8, 26)。
- (12) シェアトリアのエリエカの諸ジェエマトにも, Kayı, Kınık, Afşar といったボイ名がみられるが、それらは数が少ない。これに関しては、F. Sümer の、前掲, “Üçüklü Oğuz Boyları”, “Anadolu’da Oğuz Boyları”, “Kayılar” 諸論文参照。
- (13) Kâmil Su, *Yörük ve Türkmenler*, s. 92-92 ve Himmet Akın, *Aydın Oğulları Tarihi Hakkında Bir Araştırma* (Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Yayınları, no. 60, 1946), s. 132.
- (14) Kâmil Su, *Yörük ve Türkmenler*, s. 26-27, 10, 7, 28, 52.

- (15) F. Sümer, "Türk Aşirelerine Umumi Bir Bakış", s. 516 ve "Kayılar", s. 586.
- (16) Ömer Lütfi Barkan, XV. ve XVI.ncı Asırlarda Osmanlı İmparatorluğunda Zirai Ekonominin Hukukî ve Mâlî Esasları, Birinci Cild: Kamunlar (İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları No. 256, 1945), s. 20, madde 13; Kâmil Su, Yürük ve Türkmenler, s. 17-18, 5.
- (17) Söğüt perakendesi $\nu \tau - \alpha - \phi$ Karakeçili cemaati, Hacı Bayram 集團 (Kâmil Su, Yürük ve Türkmenler, s. 39).
- (18) Karakeçili $\text{շ} \text{ և } \text{տ} \text{ և } \text{ո}$ 諸集團 (oba) (K. Su, Yürük ve Türkmenler, s. 59).
- (19) т а л а , F. Sümer, "Türk Aşirelerine Umumi Bir Bakış", s. 517 ve "Kayılar", s. 612.
- (20) Ankara yöredekileri $\text{к} \text{ ы } \text{т} \text{ ы } \text{т} \text{ ы}$: F. Sümer, "Türk Aşirelerine Umumi bir Bakış", s. 517; Ö.L. Barkan, Kamunlar, s. 34. Uşak yöredekileri için bkz.: F. Sümer, "Üçgözlü Oğuz Boyları", s. 501 ve "Anadolu'da Oğuz Boyları", s. 375.
- (21) Ahmet Refik, Anadolu'da Türk Aşireleri (966-1200), İstanbul, 1930, s. 11.
- (22) Ömer Lütfi Barkan, "Essai sur les données statistiques des registres de recensement dans l'Empire Ottoman aux XVe et XVIe siècles", J.E.S.H.O. 1 (1957), s. 30, tablo 5.
- (23) Ö.L. Barkan, Kamunlar, s. 21.
- (24) Ö.L. Barkan, Kamunlar, s. 21.
- (25) Kâmil Su, Yürük ve Türkmenler, s. 101-102.
- (26) Kâmil Su, Yürük ve Türkmenler, s. 43-45, 90.
- (27) Kâmil Su, Yürük ve Türkmenler, s. 41, 51, 101.
- (28) Kâmil Su, Yürük ve Türkmenler, s. 21-22.
- (29) Kâmil Su, Yürük ve Türkmenler, s. 9.
- (30) Cengiz Orhonlu, Aşireleri İskan Teşebbüsü, s. 70-72.
- (31) Tayyib Gökbilgin, Rumeli'de Yürükler, Tatarlar ve Evlad-ı Fatihan (İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları, No. 743, 1957), s. 34, 44, 57.
- (32) Tayyib Gökbilgin, Rumeli'de Yürükler, s. 43-44.
- (33) Selahaddin Çetintürk, "Osmanlı İmparatorluğunda Yürük Sınıfı ve Hukukî Statüsü", DİL ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Dergisi, 2 (1943), s. 107-116, 110.
- (34) F. Sümer, "Kayılar", s. 47.
- (35) T. Gökbilgin, Rumeli'de Yürükler, s. 3-8.
- (36) F. Sümer, "Türk Aşirelerine Umumi Bir Bakış",

- s. 521. このほか :Fuat Köprülü, "Osmanlı İmparatorluğunun Etnik Menşei Meseleleri", *Belleter*, 28 (1943), s. 219-313; *Osmanlı Devletinin Kuruluşu* (Ankara, Türk Tarih Kurumu, 1959): "Alp" maddesi, *İslam Ansiklopedisi*: Mustafa Akdağ, *Türkiye'nin İktisadi ve İçtimai Tarihi* (Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Yayınları, No. 1313, 1959), Cild 1, s. 114-125; Paul Wittek, *Menteşe Beyliği* (Ankara, Türk Tarih Kurumu, 1944), s. 1-5.
- (37) Speros Vryonis Jr., *The Decline of Medieval Hellenism in Asia Minor and the Process of Islamization from the Eleventh through the Fifteenth Century* (Los Angeles, University of California Press, 1971), p. 261-262.
- (38) Mükrimin Halil (Yımanç), *Türkiye Tarihi: Selçuklu Devri I. Anadolu'nun Fethi* (İstanbul, Akşam Matbaası, 1934), s. 83.
- (39) Residü'd-din Fazlallah, *Cami'ü't-tevarih*, (Bahman Karimi neşri, Tehran, 1338), 1, s. 399-416.
- (40) Paul Wittek, "Osmanlı İmparatorluğunda Türk Asirelerinin Rolü", *İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Tarih Dergisi*, 13 (1963), s. 257-268.
- (41) Kazak, Özbekのように, のちになって形成された集團が Kongrat のような伝説的な名をつけたことについて : A. Zeki Velidi Togan, *Bugünkü Türkîli (Türkistan) ve Yakın Tarihi* (İstanbul, 1942-47), s. 40, 43.
- (42) Ahmet Temir, *Moğolların Gizli Talihü* (Ankara, Türk Tarih Kurumu, 1948), s. 224-232.
- (43) Ahmet Temir, *Moğolların Gizli Tarihi*, s. 233.
- (44) Ahmet Temir, *Moğolların Gizli Tarihi*, s. 233-322.
- (45) John A. Boyle, *The History of the World-Conqueror by 'Ala ad-Din 'Ata-Malik Juvaini* (Harvard University Press, 1958) s.11, 607. Residü'd-din Fazlallah, *Cami'ü't-tevarih*, (Bahman Karimi neşri) 1, s. 399.
- Residü'd-din Fazlallah, *Cami'ü't-tevarih*, (A.A. Alizade neşri), Baku, 1957, 3, s. 22.
- (46) Residü'd-din Fazlallah, *Cami'ü't-tevarih*, (A.A. Alizade neşri), 3, s. 2.
- (47) Hsiao Ch'i-ch'ing, *The Military Establishment of the Yuan Dynasty* (Doktora tezi, Harvard University, 1969), s. clvi, 4, 81-83. この博士論文は同じ題名で出版された (Harvard University Press, Harvard East Asian

Monographs, 77, 1977): Mori, Masao, "Gencho ni okeru tanbasaki buzoku ni Tsuite", *KITA AJIYA-GAKUHÔ*, 3 (1944), s. 127-205.

(48) Reşidü'd-din Fazlallah, *Cami'ü't-tevarih* (A, Ali-zade neşri), 1, s. 151: Gerhard Doerfer, *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*, 1 (Wiesbaden, 1963), pp. 255-257.

(49) Reşidü'd-din Fazlallah, *Cami'ü't-tevarih* (Bahman Karimi neşri) 1, s. 415. Celed という言葉が同じ意味で使われる例については, Ömer Asım Aksoy, *Gaziantep Ağzı*, s. 111 (Ankara, Türk Dil Kurumu, 1946), s. 153 をみよ。

(50) Ömer Lütfi Barkan, "Osmanlı İmparatorluğunda bir İskân ve Kolonizasyon Metodu olarak Sürgünler", *İktisat Fakültesi Mecmuası*, 11 (1949), s. 542-569.

(51) Reşidü'd-din Fazlallah, *Cami'ü't-tevarih* (Bahman Karimi neşri) 1, s. 415.

(52) Reşidü'd-din Fazlallah, *Cami'ü't-tevarih* (A. A. Alizade neşri) 参照。

二

本稿は、オスマン帝国における遊牧民 (konar göçer) 諸

集団が「アシレット (aşiret) およびユリユク (yörük) の名によって互いに区別されている原因を、遊牧民諸集団が経過せねばならなかったいくつかの段階を通じて考察することを目指すとしている。ただし、オスマン帝国においてみられたこうした相連は、それだけに固有のものではなく、モンゴル人たちが歴史の舞台に登場した時期にもみられた。そのことも本稿では強調されることになる。

オスマン朝時代において、クズルウルマク (Kızıl İrmak) 川を境界として、その東部および南部にいた遊牧民諸集団は「テュルクメン」もしくは「アシレット」とよばれ、クズルウルマク川の西部にいた集団は「ユリユク」とよばれたことはよく知られている。⁽¹⁾ ルーメリアのユリユクは後者に属する。ただし、ユリユクという言葉は、決してひとつのカヴァム (kavim) ⁽²⁾ もしくは「ウルス (ulus):—イール (il)」⁽³⁾、あるいはカビン (kahle) ⁽⁴⁾ を示すわけではなく、この単語の構造が示すように、この言葉はたんに今日われわれが遊牧民という言葉によって理解しているところの生活形態を表現しているにすぎない。したがってこの用語は、かれらが居住している地域内における遊牧民たちに対する一般的呼称である。公式文書では、ときには「ユリユク」の用語が遊牧民をさす言葉として東部アナトリアのテュルクメン集団に対しても用いられている場合がある。⁽⁵⁾ しかし民衆の間では「ユリユク」の用語はク

ズルウルマク川西部においてのみ使用されたようである。

東部地方の人びとは、遊牧民集団に対して「ギョチュルII エヴ(göçer ev)」、「アシレト」、「テュルクメン」の用語を使った。オスマン帝国における遊牧民集団の状況を調査すると、遊牧民諸集団は、かれら自身の内部組織や中央との関係の点からみて、三つのグループに分けられる。

①かれら自身の内部的事柄の処理において自由であり、中央との関係も少なく、「イル」もしくは「ウルス」とよばれる政治的統合体(birik)のもとに、古い部族(boy)の伝統にしたがって、ボーIIベI(boy bey)たちによって統轄されるテュルクメン諸ボーIと諸オイマク^(四)：

ジョマアト(cemaat)ともよばれるこれらのオイマクの筆頭にはケトヒュダー(kehüda)と名のるオイマク長(coymak başı)が存在する。かれらがボーIIベIによって任命されたことを示す若干の記録がある^(四)。

アレップボーIテュルクメン、ドウルカドウルルIIウルス、イエニIIイル、ウルウIIユリユクIIテュルクレル(türkler)、ボズIIウルス、ラマザンルIIウルスなどの名でよばれるこれらの「イル」もしくは「ウルス」の大部分は、ハス(has)のレアヤー(reaya)であった^(五)。各集団の規模について示唆をあたえるためにボズウルス(Bozulus)を一例にあげよう。かれらは、一五四〇年ごろ、六九〇オイマクと一〇一オイマクと

からなる二つのグループから構成されており、双方合わせて七、三二五戸(tâne)——すなわち、約四万人——の人口を有し、合計約二〇〇万頭の羊——ただし子羊をのぞく——を所有していたことがわかる。同じころ、かれらは約二〇〇万アクチェの税を取っていた^(六)。アレップボーIテュルクメン(Halep türkmenleri)については、ボーI数で一〇を、オイマク数で一〇〇を越えていた^(七)。

以上を要約すれば、各集団はそれぞれカビレを基本として統轄され、中央との関係の少ない集団であった。このことは、かれらのオスマン朝政府との関係が、ハスのレアヤーであるがゆえに、どちらかというとハスの徴税官(voyvoda)とアシレト長(Ümerâ-i'asâir)とよばれたボーIIベIとの間にかぎられていたことを示している^(八)。

②ふつうアナドル州内に居住する、小規模なユリユク集団

かれらの間にはテュルクメンにみられるようなカビレ組織はない。かれらは一般に小集団で生活している。ただし、コニヤ地方にいるアトチェケン(Arçeken)組織だけは例外でありうる。これらユリユク集団は、ふつう、アンカラIIユリユクたち、ソユトIIユリユクたち、キュタヒアIIユリユクたちというように、それぞれが住んでいる地域名によってよばれている^(九)。他方いくつかのユリユクのジエマアトは牧畜以外

の経済活動に応じて、「羊毛作り Yüncü」、「弓作り Yaya」、「太鼓作り Davul」⁽¹⁵⁾といった名称をもってよばれたり、また、ときにはリーダーの名前でよばれることがあった。⁽¹⁶⁾つまり、ある種のユリウクのジエマアトが、歴史的な部族名にかわって新しい名称を獲得する際に、それが経済活動や人物名に収斂したことを示している。経済活動によってみずから名のつたり、もしくは命名されたこれらの名「をもつジエマアト」が、実際にそうした経済活動をしていたことに關して、たとえば、「Yaya Bedir」ジエマアトが税として『柄付小弓 kaba keman』を、「鍛冶工 Demirciler」ジエマアトが『鉄』を納入していたことを示す若干の資料が存在する。⁽¹³⁾ただし、「笛作り Kavalçılar」、「矢作り Okçular」、「火薬作り Barutçular」、「羊毛作り Yüncü ユリウク」、「太鼓作り Davul」といった名称をもつジエマアトたちについては、かつて『馬(a)』で税を納めていたアトチェケン・ウルスが、⁽¹⁷⁾そうであるように、のちに別の形で税を納めるようになったか否かを調査する必要がある。このほか、そうした名称を獲得していないが、「タカの飼育係 dogançılık」、「ハヤブサの飼育係 şahinçılık」として「土地台帳に」登録されたユリウクたちも存在した。⁽¹⁸⁾また税を『純良バター rıgani-sade』や『毛糸 yün ipiği』⁽¹⁹⁾で納めることを義務づけられているユリウクたちもみることができる。牧畜とは別に、そうした、

べつの経済活動を義務づけられているこれらのユリウクたちの大部分は、ブルサ、キュタヒヤ、アイドゥン、メンデシエ、ハミド、テケ、コニヤの各サンジャク(県)に存在している。エミール・スルタン (Emir Sultan)、『西聖都 (Haremeh-i Serifeyn)』ムラト一世、ムラト二世たちの設置したワクフのレアーヤー——ただしこれらのワクフに対して「ハス」という用語がもちいられる場合がある——、あるいはオスマン王家一族 (sultanlar) のバシマクルク (başmaklık) としてのハスや王子たちに割当てられたハスのレアーヤーとされたユリウクたちからなっていることがわかる。⁽¹⁹⁾このほかに、アンカラ・ユリウクたちのようにひとつのサンジャクに、あるいはウシヤク・ユリウクたちのようにひとつのカザー (kaza・郡) に属する(?)ムカーター・ハーネに指定されているユリウクも存在する。⁽²⁰⁾あるスイパーヒーのティマールに直接くみ込まれている「細分化した」ユリウクたちもまた存在した。⁽²¹⁾ただ、一六世紀のアナドル州総人口の一六%—一七%を占めていた遊牧民人口のどれだけがハスのレアーヤーで、どれだけがその枠外にとどまったかは明確ではない。

牧畜のほかに、べつの経済活動による任務を義務づけられた、そしてすべてではないがその多くがハスのレアーヤーであるとわれわれが推定した、これらのユリウクに対して法令

集 (Kaanunameler) は、『ハスのユリユクたち (haasa yörükleri)』とよんでいる。⁽²³⁾ かれらはすべての『臨時税』⁽¹¹⁾ を免除されていると同時に、国有地の徴税請負人、ザイーム〔中級封土の保有者〕、ティマール保有者、ムラヤオジャクの警備官 (asker) たちに、その収入として割当てられている夏営地税と冬営地税をも共に免除されていたようである。歴代スルタンのワクフやハスのレアーヤーであるこれらのユリユクの納税義務は、Rüşum-i-raiyet 羊税および bad-i-havâ 税⁽²⁴⁾ である。行政官たちがかれらから『Selâmiye』とか『Toprak bastı』と称して税をとることは禁じられていた。これに対して、ハスの枠外にとどめられたユリユクたちはおそらくこうした免除特権を受けていなかったのであろう。みずからワクフにくみ込まれることを希望する者が出たり、またときには、『ユリユク長が』『私の部民 (taife) はワクフに属しているのだ。お前はわれわれからムカーター・ハーネ税を徴収できない』⁽²⁵⁾ といって反対することがあった。

アナドル州内に存在したこれらのユリユク集団は、小規模であり、真の意味で解体した集団であると同時に、かれらの国家との関係もまた、『イル』や『ウルス』を基本としたものではなく、小さなジエマートを基礎としている。国家は若干の免税特権を代償としてかれらから経済的利益を受ける一方で、かれらに政治的自由をあたえることなしに、かれらを小

グループに分散させたままで国家に従属させつづけたのである。その際、国家は、かれらが元来細分化された状態であったという事実と、東部アナトリアにおけるアシレトのようにかれらにボイに立脚させないという方法とを通じて、こうした状態を確保することができたのである。一七世紀末に東部のアシレトから分離して西方へきた遊牧民たちを定住させるときにも、国家は、やはりかれらを小グループに分散させて定着させる政策を採用した。⁽²⁶⁾

③ ルーメリアのユリユクたち：

かれらの間では、もはや古いボイの名はその面影さえみられない。かれらは最初は二四人、そしての中には三〇人編成の『オジャク (ocak)』⁽²⁷⁾ とよばれるグループに分かれていた。かれらは夏営地税および冬営地税を免除されており、しかし、慣習税 (Rüşum-i örfiye) をスルバシ (subaşı) たちに支払っていた。⁽²⁸⁾ ヤマク (yamak) たちがエンキンジ (ekinci) たちに支払った五〇アクチュエ〔すつの現金〕は『臨時税』に相当する。⁽²⁹⁾ 要するに、かれらは軍事奉仕をしたけれども、そのほかの軍人階級 (askerîye) とはちがって、いろいろな義務や労役 (hizmet) を免除されていなかった。⁽³⁰⁾ ただ、かれらの諸義務が軍事的性格をもっていただけである。

(二)

以上のようにその基本的な相違だけについてながめてきた、⁽³⁴⁾「アシレト」「アナトリアのユリユク」「ルーメリアのユリユク」諸集団が、遊牧民集団として、時として、通過せねばならなかった諸段階のどれに相当するのか、そしてその諸段階とはなんであるのか。以下にその問題について考察するが、その前に、うえにのべたように三つの相違を示すオスマン朝の遊牧民の起源についてふれておこう。

〔東部アナトリアの〕アシレトは一般にモンゴルの侵略から逃れてアナトリアへやってきたオグズ諸部族 (Boy) であり、また、⁽³⁵⁾ルーメリアのユリユクたちはアナトリアのユリユクの中から「分離されて」ルーメリアへ移された遊牧民であることはわかつている。起源的に最も不明瞭なのはアナトリアのユリユクたちである。おそらくこのためであらうか、一時⁽³⁶⁾期ユリユクという言葉の人的な意味が問われたことがある。アナトリアのユリユクたちは、かれらの存在した地域および起源の点から、セルジューク朝の辺境地帯にいた人びとの末裔である、という説がある。これによれば、セルジューク朝の辺境地帯において形成された最も活動的な集団は——定住した都市民をのぞけば——「アルプ」あるいはガーズィの称号をもつ戦士たちと、かなり多くの人口にのぼる辺境

(三) テュクメンたちとから成っていたことが知られている。⁽³⁸⁾ 不明な点はいずれがどのカビレに属していたかである。なぜならば、同時代の資料は、いちにの例外をのぞけば、ボイ名を示さないからである。ただ、この辺境テュルクメンたちが遊牧民であることを考慮して、かれらがかつてボイを基本とした生活をしていただけは前提とされている。⁽³⁷⁾ 検地帳 (Tahrir defterleri) や地名に関する研究もまた、かれらがアナトリアの各地に小グループに分かれて分散したこと、そしてその後それらの地に定住するに際して、カイウとかクヌクといったボイ名をその周辺にあたえたことを明らかにしている。かれらはホラーサーンやイランにおいて反乱の原因になったり、混乱をひき起こしたりしたオグズ族のボイやウルスであった。そのためセルジューク朝は将来、かれらがボイを紐帯として団結して自治的集団や国家を作ることのないように、各ボイやウルス (の成員) をそれぞれべつの地域に送って分散させるために、イクターをあたえて辺境地帯に定着させたのであった。⁽³⁸⁾ つまり、辺境地帯に移されたテュルクメンたちは、すでにここへ来た時点において細分化されていたことが判明した。

このように「集団が」細分化されたか、されないかがアシレトとユリユクとの区別の最も明瞭な指標である。東部における、細分化されていないテュルクメン諸アシレトが一般に

モンゴルの侵略を逃れてきた諸部族であることはすでにのべた。かれらは集団で移動したために分散することがなかったのである。これに対して辺境テュルクメンとよばれる集団は「意図的に」細分化されたのである。この細分化と分割とは、みな国家権力によってなされた。

経済的に社会的に相互に依存し合っている家系(*gö*)やオイマクの構成員たちから成りたっているボイにおいては、忠誠はボイやボイ・ベイに対して向けられる。この忠誠は伝統を通じてもまた強化される。このために、家系やボイだけに依存する王朝(*shide*)や国家においては、ボイ・ベイたちの忠誠の継続性が常に重要な問題となる。こうした王朝や国家は長続きしなかった。それだからこそ、遊牧民の生活形態を変えることなく、ボイ内部における紐帯を変化させようとする試みは歴史上において「オスマン朝」以前にも見られるのである。ボイを分散させて、ボイやボイ・ベイに対する紐帯を打ちこわし、かれらの忠誠を最初は君主に個人的に従う人たちに向わせ、そのあとで、その関係を直接王朝や国家に向けさせる、そういう過程はチンギス・ハーンとその子孫との時代にもみることができる。

(三)

うえに非常に簡単にのべた過程のひとつだが、「モンゴル

の」支配権争いにおいてチンギス・ハーンに味方する諸部族と、これに敵対する諸部族との二つのグループへの分裂の中にみられる。軍隊が編成されたとき、味方をした諸ボイの指揮官には部族長たちが任命された。敵対した諸部族は分割されて、旧来の部族の紐帯は破壊され、「部族の成員たちは」チンギス・ハーン個人に従う「ネケル」と「ノヤン」たちの指令下におかれた。これに関するリストからわかるかぎりでは、各千人隊は三〜四のボイの成員たちで構成されている。つまり諸ボイは完全に分解されたのではなく、小グループの状態で千人隊の中にくみ込まれていた。オスマン朝の用語法を使えば、これを「細分化された(*Perakende*)」ということが出来る。これに対してチンギス・ハーンを支援した諸部族は旧部族長からなる新たな千人長のもとで分解されることなく存続しつづけた。

こうした分割政策はそれ以後の時代にもみることが出来る。モンゴルにおいては、この分割政策が軍事的利益のために行なわれていた間は、(1)君主、(2)君主に個人的に臣従するノヤンたち、(3)ノヤンたちに従う万人隊(*tieman*)と千人隊、という形式のグループ化がみられる。つまり、この状態では古い部族関係ではなく、個人を中心として形成された関係が支配的である。アナトリアにおいて、セルジューク朝の辺境地帯では、またその後の諸侯国においても、この種の関係が

形成されたがゆえに、個人名をもつ諸ジェマアトが存在するのを見ることが出来る。それどころかセルジュク朝自体でさえ、その初期には一人の個人に臣従する関係が支配的なひとつの集団としての性格をもつことが読みとれる。ただし、この場合は、分割政策によるものではなく、部族との関係を失った人びとが特定の個人の周辺に集まった結果である。モンゴルの間ではこうした人びとのことを『ネケル』とよぶ。このようにして個人の周辺に形成された、もしくは形成させられた集団の性格は、伝統的な部族関係にしばられたものではないと同時に、それが解消するものもまた、それなりに早い可能性がある。また、伝統的な部族名をもつ諸ジェマアトが、これらに「個人を中心とした集団に」、時にはみずから進んで、時には仕方なしに合併することもありえた。⁽⁴⁾これについての例も多い。ただ、個人に従属した小規模な集団も、ふたたび解体しない場合には、数世代をへて新たな部族を形成することがある。東部アナトリアへ、一三世紀にモンゴルの侵略を逃がれたカビレだけがきた、というならばそれは誤りでであろう。この地域においても個人名をもつボーイやオイマクの多いことは、これらがセルジュク朝の辺境地帯であったこの東部アナトリアに分散した状態でやってきたことを示している。ただし、このボーイやオイマクは継続的な解体過程をたどらなかったために、部族生活を続けることができたのである。西アナトリア、すなわちルームセルジュク朝の辺境地帯についていえば、興亡の激しい諸候国をめぐって、政治的統一を形成する遊牧民の主従関係はしばしば交代したために、この地域における遊牧民は、小さな集団のままに存続しつづけたのである。それと共に、国境が常に変動するこの辺境地帯において、遊牧民たちはキリスト教徒とイスラム教徒とを問わず、都市民と密接な関係にあらねばならなかった。どちらかというと経済的であったこの関係が存続しうるためには、集団が小規模であることが重要であった。オスマン朝の政策もまた、この地域における遊牧民が小集団のままに生活することを保証する代わりに、かれらが政治的な存在となることを妨げたのである。この政策のおかげで、国家はムカーター・ハーネおよびハスのレーアーヤという法的地位の枠内でみずからに従属させた遊牧ユリク集団と定住民との間にひとつの調和を生みだすことができ、国家とスイパーヒー、スイパーヒーとレーアーヤとの間の個人対個人の関係ともいふべきティマール制を生みだし、存続させることができたのである。オスマン朝のティマール制が、アシレトの居住地域ではなく、「細分化された」ユリクたちの存在した地域で、より発達したことは注目に価する。さらに、この調和の中で一六世紀中葉にいたるまでに多くのユリクたちが進んで定住生活へ入ったのがみられる。この地域にお

たのである。西アナトリア、すなわちルームセルジュク朝の辺境地帯についていえば、興亡の激しい諸候国をめぐって、政治的統一を形成する遊牧民の主従関係はしばしば交代したために、この地域における遊牧民は、小さな集団のままに存続しつづけたのである。それと共に、国境が常に変動するこの辺境地帯において、遊牧民たちはキリスト教徒とイスラム教徒とを問わず、都市民と密接な関係にあらねばならなかった。どちらかというと経済的であったこの関係が存続しうるためには、集団が小規模であることが重要であった。オスマン朝の政策もまた、この地域における遊牧民が小集団のままに生活することを保証する代わりに、かれらが政治的な存在となることを妨げたのである。この政策のおかげで、国家はムカーター・ハーネおよびハスのレーアーヤという法的地位の枠内でみずからに従属させた遊牧ユリク集団と定住民との間にひとつの調和を生みだすことができ、国家とスイパーヒー、スイパーヒーとレーアーヤとの間の個人対個人の関係ともいふべきティマール制を生みだし、存続させることができたのである。オスマン朝のティマール制が、アシレトの居住地域ではなく、「細分化された」ユリクたちの存在した地域で、より発達したことは注目に価する。さらに、この調和の中で一六世紀中葉にいたるまでに多くのユリクたちが進んで定住生活へ入ったのがみられる。この地域にお

ける均衡は、どちらかというと、東部のアシレットが自分たちの土地を放棄してアナドル州内で匪賊活動をはじめたことによって破られたのである。

(四)

ふたたびチンギスIIハーンの時代に戻ろう。そこではもうひとつの「部族集団の」分割方法がみられる。それは、それによって各個人の遊牧民としての性格が維持されると同時に、それら個人の関係や紐帯をいまや直接君主および国家との間のものとする方法である。この方法は、最初、チンギスIIハーンの「怯薛」⁽⁴³⁾とよばれる昼・夜の護衛組織問題の中にみられる。この方法で、チンギスIIハーンはかれの護衛たちを、新しく組織された九五の千人隊の中から選抜した⁽⁴²⁾。そして、昼・夜の護衛職を威信の高いものに位置づけ、とくに夜の護衛は兵役を免除され⁽⁴⁴⁾、料理番、財務官、軍需品調達係といった任務を課せられた⁽⁴⁴⁾。こうした状態は、われわれにアナトリアのユリクたちのうち、経済活動を中心として形成されたジュマアトの存在を想起させる。ただし、この点は古文書資料にもとづく裏づけを必要とする。

もともと細分化された部族民たちを、ふたたび解体して君主に従属させる、つまり、国家的任務に採用する方法はフビライIIハーンとフラグIIハーンとの軍隊の組織の際にみられ

る。これら両者が辺境——中国やイラン——に引率した兵士は全モンゴル軍団の十人隊(mangai)⁽⁴⁵⁾の中から二人ずつピックアップする形で抽出されたのである。君主たちのインジュとみなされ⁽⁴⁶⁾、中国では「探馬赤」、イランではタマ兵(Tamachians)と命名されたこれらの兵士たちは、資料によればつぎのように説明されている。『千人隊、百人隊、十人隊の中から抽出され、べつの州や国ぐにに派遣されそこで駐屯するために送られた兵士たちである』⁽⁴⁶⁾。べつの資料によれば、これに「sooq」すなわち無法者が含まれていたといわれる⁽⁴⁹⁾。つまり、共にオスマン朝における「強制移住政策(göçmen)」に匹敵する⁽⁵⁰⁾。この「タマ兵」たちを指揮する人物は司令官たちの息子や兄弟たちの中からえらばれた⁽⁵¹⁾。このように、フラグIIハーンの兵士たちは遊牧生活を継続はするが、決して部族を基盤として編成されたものではなかったことがわかる。モンゴリアや中国における親類との間に存在する民族的紐帯を失なうことのなかった司令官たちについてはかれらがどの部族に属するかわかっている⁽⁵²⁾。かれらの指揮下にある兵士たちも、また司令官たち自身も、遊牧生活を続行している軍団員として、あたえられた任務を遂行する義務を有し、直接君主に臣従する人びとであった。

オスマン朝におけるルーメリアのユリクたちが、イルIIハーン朝の「タマ兵」と異なるところは、前者が、君主個人

ではなくて国家権力に直接従属する点である。ルーメリアのユリユクたちが「オジャク」を形成した過程についてわれわれは十分な資料をもっていないが、一方では「オジャク」というものが部族的基盤を全くもっていないことと、他方ではルーメリアのユリユクたちがチンギスハーンの宿衛同様に兵士ではあっても、直接軍事的なものではない任務を負っていたこと、また「タマ兵」のように国境に居住するために任務をあたえられたことなどは、ルーメリアのユリユクたちもまた、「タマ兵」に似たような形で組織化されたことを示している。

(五)

オスマン朝とモンゴル族との社会の中で互いに相違をみせる遊牧民集団についてのわれわれの知識は、それぞれに違った種類のものもあるけれども、その双方ともに、部族組織が解体された結果生じた「細分化された」集団——ただし生活形態は変らない——であり、それぞれの社会における政治

的、社会経済的役割をしだいに変えられて、その結果国家的任務をあたえられてゆく。そうした過程をわれわれは追求してきた。オスマン朝は東部アナトリアの諸部族については、これを分割・解体することはできなかったが、すでに分解していた遊牧民たちについては、これと定住民たちとを調和させ、国家に臣従するグループとして維持することには成功した。また、どの遊牧民が国家に有益な任務担当者として利用しうるかを見誤まらなかった。すなわち、東部アナトリアの諸アシレトを任務担当者とするといった、決して成功しえない政策を採用しなかったことは、オスマン朝国家が遊牧民集団の内的構造とダイナミズムとを熟知していたことを示すと共に、かれらを定住民集団と軋轢や対立を起させない形で駆使しえたことにオスマン朝国家の成功の要因があった。チンギスハーンとその息子たちとは、部族を分割することには成功したけれども、定住民と遊牧民との間の調和を確保することができなかったがために（その国家を）永続させることができなかったのである。